

国語

次の文章は、水野瑠見『十四歳日和』(講談社)の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

つい一週間くらい前までは身が切れそうなほど寒かった気がするのに、今日は制服の背中が、うつすら汗ばむほどの陽気だ。

「なーんかさー、ザワ先^{せん}のヤツ、わりとあつさりしてたよなあ。お別れ会とか、百井^{もい}への叱咤^{しった}激励とか、なんかしらあるかと思ってたのに。なにせ、体育会系だし」

カラカラと自転車を押しながら、俺はぼやいた。百井が隣で苦笑いする。

「それは、僕が頼んだんだよ、先生に。お別れ会とかあいさつとか、そういうのはA仰々しくて恥ずかしいからやめてください、って。かなりしぶられたけど」

「そういうとこ、やつぱひかえめだよなー、百井って」

「うん。謙虚だからね、僕は」

「いやいや、謙虚って自分で言ったら、謙虚じゃねえよ」

代わり映えのしない道のりを歩きながら、俺たちは心なしかいつもより饒舌^{じょうぜつ}で、そして、陽気だった。沈黙をうめようとするみたいに、俺も百井もつまらない冗談を言って、べつだんおもしろくもなんともないのに、声を立てて大げさに笑った。

けれどいくら名残惜しんだところで、通学路は、いつもの長さのままだ。十五分も歩けば、簡単に、別れ道についてしまう。

「矢代くん。じゃあ、僕、こっちだから」

踏切を越して、しばらく歩いた先の交差点に差しかった時、百井が言った。

「……あ、そっか」

【Ⅰ】ような返事をして、俺はこの日、初めてちゃんと正面から、百井を見た。裾^{すそ}が短くなりすぎて、くるぶしまで見えているズボン。相変わらずのぼさぼさ頭……そういう百井のいでたちを見下してた日々が、急に、昔のことのように思えた。

何か言わなくちゃ、と俺は思う。

これで最後なんだから。感動的な、かつこつけられるような何かを――、

「ま、元気でやれよ」

結局、俺が選んだのは、そんなBありきたりな一言だった。

「うん。矢代くんもね」

と、百井は、きまじめな顔でうなずいた。

そうしてお互い、「じゃあな」って手をふり合って、背中を向ける。

拍子抜けするぐらい、【Ⅱ】とした別れぎわだった。

しばらくチャリを押しながら歩いてみて、百井の足音も聞こえなくなったところ、①俺はふう、とため息をついた。深呼吸してふり向くと、アスファルトの道の上に、百井の姿は、もうなかった。

ペダルに足をかけながら、俺はぼんやりと、頭の端で考える。

春休みが終わって学校に行っても、もう百井はいないんだ。

そう理解はしていても、なぜか実感がわかなかった。

というか、実際三年生になっても、卒業するころになっても、ずっとぴんときないような気さえする。そ

うして永久にぴんとこないまま、俺は百井のことを、次第に忘れていくんだろう。

——まあ、そんなもんだよな。結局は。

妙に冷静な気持ちで、そう思った時だった。

どこからか甲高い笑い声が響いてきて、俺はびくつと肩を跳ねさせた。と、顔を上げたたん、ランドセルを背負った小学生たちが、すれちがいざまに、俺のわきを全速力で駆けていった。どうやら、近所の小学校も、今日が終業式だったらしい。

「ちよつと待つてよ、置いてかないでよ」

と、いちばん背の低いメガネの男の子が叫ぶと、「バーカ、お前がトロいんだって!」「早く来いよ!」と仲間らしいふたりが叫び返す。メガネの子は、どうしてなかなか負けん気が強いらしく、「うるさい!」と言い返して、すぐさまふたりの後を追いかけていった。

竜巻のような三人組の背中が、みるみる遠ざかっていくのを眺めながら、俺はふと、自分がガキだったころのことを思い出した。

毎日あちこち走り回って、わけもなく大声で叫んでみたりして。友達とどつき合って、ゲラゲラ笑って。思い返してみても、バカみたいだ。でも、あのバカみたいな一瞬一瞬が必死で、ただ、一生懸命だったこと。

楽しかったな——。

そう思った瞬間、俺は、はっと息をのんだ。②わだかまっていたもどかしさの理由が、急にすんと、胸に落ちた気がしたからだった。

——ああ、そうか。俺が百井にいちばん言いたかったのは……、

気づいたらもう、じつとしてはいられなかった。

チャリを方向転換させ、勢いをつけてペダルを踏み込む。どうか百井を見つけれますようにと、心の内で念じながら。

全力で走った。

そりやもうめちやくちやに、本気の本気で、チャリを飛ばした。

だから道の先に、ひよろつとした百井の背中を見つけた時、俺はどつと安堵したんだ。

「もーもいー!」

俺が叫ぶと、百井が弾かれたようにふり返った。びくくりしたようにどんぐりまなこを見開いて立ち止まった百井の前に、俺は急ブレーキで停車する。

「どうしたの、矢代くん」

ぜえぜえと息を切らしてハンドルに額を預ける俺をのぞきこんで、けげんそうに百井が問いかけてくる。何度か深呼吸して息を整えると、俺はまぶたの汗をぐいっとぬぐって、まっすぐに百井を見た。

「……今からさ、遊ばねえ?」

ひとりでに、言葉が口をついて出る。「え?」と百井はなおもけげんそうにまばたきをしたけれど、③構わず俺は、一気につづけた。

「ガキみたく、全力でさ。走ったり、叫んだり。そういう、バカみたいな遊び。……だってさ、俺、お前とちゃんと遊んだこといっぺんもないじゃんか。最後くらい、勉強じゃなくて、くだらねえこと一緒にしようぜ。だって俺ら、まだ中学生じゃんか」

懸命に言い連ねながら、なんてめちやくちな言い分だ、と自分であきれた。

でも、まぎれもない本心だった。

百井はきつとこの先も、急いで大人になろうとするんだろう。それは、悪いことじゃない。だけど、覚えてい

てほしかった。本当に大人になった時、ああ楽しかったな、って、今日のことを思い出してほしかった。肩で息をする俺を、百井が、ぼかんとした顔で眺めている。

それを見て、俺は急に心細くなってきた。こんなの、Cひとりよがりなんじゃないか、百井はこんなことこれっぽっちも望んでないんじゃないか。そんな不安が、今さらのように押し寄せてくる。恥ずかしさが胸をよぎって、俺は、とうとううつむきかけた。

けれど、その時だった。

「……うん！」

うれしそうな百井の声がすぐそばで弾けて、俺ははっと顔を上げた。

おずおずと、前を見る。

百井はきらきらと目を輝かせて、笑っていた。

まるで、とっておきのいたずらを持ちかけられたみたいに。わくわくしてたまらない、今すぐにも走り出したいって気持ちが見える。

④それは、まぎれもない、子どもの百井の顔だった。

俺たちは二ケツして、アスファルトの上をぐんぐん走る。

荷台に乗った百井は、二ケツそのものが初めてらしく、バランスを取るのとかく下手だった。曲がり道で、身体の重心を置く方向を間違えてチャリが大きくぐらつくたびに、俺たちは、悲鳴に似た雄^おたけびを何度も上げた。た。

「百井、お前重心そっちじゃねえって！ 逆！ 逆！」

「矢代くんのせいだって！ どっちに曲がるか、早く言ってくれないから！」

ぎやあぎやあめきながら道路を疾走^{しっそう}していく俺たちを、荷車押してるじーさんばーさんや、ネギがのぞく買い物袋を提げたおばさんたちが、失笑まじりでふり返る。最近の若い子はまったくねえ……ってため息でも聞こえてきそう。実際、そうなんだろうな。みんな、バカな中学生がふたりそろって何やってんだ、って思うことだろう。

でも、そんなの、今は気にならない。気にしてられない。

河原で水切りをしてみたい、と百井が言うので、俺たちは市役所の前に流れてる川を目指してひた走った。町をまっぴたつに割るこの川は、小学生のころの、俺たちの格好の遊び場のひとつだった。流れがゆるくて、広い河原にはいろんな植物が生えている。あたたかい時期には、川に棲^すんでる魚の尾びれが光って見えることだってある。

河原に降り立った百井は、足元に転がってる石ころをいくつか拾い上げると、「まずは矢代くんがお手本見せてよ」と楽しそうに笑った。

「それはいいけどさ。百井、まず石選びがなってないって。そんなごつい石じゃなくて、なるべく平たい石のほうがいいよ」

ほら、と手ごろな石をふたつ拾って、百井にひとつ投げてやる。そうして、もうひとつを右手に持つと、手首にスナップをきかせ、きらきら光る川面に投げる。石はひゅっと一直線に飛び、と、と、と、とつ、と五回水切りをして、水底に消えた。

「おおー」と感嘆する百井に、「こう、水面を切るように投げるのがコツだな」と、指導者ぶって、俺は言う。

「ほら、百井もやってみろって」

百井は元気よくうなずくと、力んだ足取りで、一歩前に進み出た。

「——せーのっ！」

思い切り、ふりかぶる。が、石は水平に飛ばず、高々と変な曲線を描いて、ぼちゃつと哀れな音を立てて落ちた。そのうえ百井は勢いあまって、前のめりに川の中へ手をついた。派手な水しぶきが上がり、百井が「冷たっ」と短く叫ぶ。情けない顔でこつちを向いた百井は、さながら、ぬれねずみみたいだった。

「だっせー！」

俺が指さしてげらげら笑うと、すかさず百井が「なんだと！」と水を両手にすくってかけてくる。あわやのところでとびのいた俺は、「やりやがったな！」と笑いながら、百井につかみかかる。そこからなぜか、プロレスごっこのようなもみ合いになった。で、途中からなぜか鬼ごっこに変わり、全力疾走してた百井が思い切り犬のうんこを踏んで、俺も砂利につまずいて派手にぶっこけた。

「あー疲れた、走りすぎた」

河原にごろつと大の字になった俺の隣に、「矢代くん、歳としなんじゃない？」と笑いながら、百井がすとんと腰を下ろす。そしてふと、草のしげる地べたを見下ろすと、

「あ、オオイヌノフグリ」

とつぶやいた。

顔だけ動かしてそちらを見やると、すぐそばに、青い小さな花が咲いていた。聞き覚えがあるような名前だ。そういえば昔、教科書で見たっけな。

「よく覚えてんなあ。⑦雑草の名前なんて」

「まあね。矢代くん、フグリ、ってどういう意味か知ってる？」

「知らね。何？」

「金玉って意味だよ」

百井は、すまし顔でそう言った。

俺は一瞬あっけに取られて、それから腹を⑧抱えて、爆笑した。こいつ、あほだ。しょうもなさすぎる。身をよじって、笑って笑って、大笑いするうちに、しまいには、涙が出てきたくらいだった。

——いいじゃんか、ガキでもさ。

空を見上げて、だれにともなく俺は話しかける。せめて、今日は。今日ぐらいは。

俺たちが⑨キロについたのは、すっかり日が⑩暮れたところだった。俺たちときたら、昼飯も食わないまま、六時間以上もぶっ通しで遊び回っていたんだ。自分でもびっくりしたよ。

街灯が灯りかけた道を、俺たちは言葉少なに歩いた。

百井も俺も、さんざん走り回ってエネルギーを消耗しきっていたし、叫びすぎて、のどはもうがらがらに噎かれていた。疲れ果てて一歩でも進むのがおっくうだったが、なぜか、⑪嫌な疲れ方じゃなかった。何かひとつのことをやり切った、達成感にも⑫二た、疲労感だった。

「……楽しかったな。今日」

砂利を踏む靴音に、百井のつぶやきが、ふと混じった。

「だろ？ たまにはいいだろ、⑬こういうのもさ」

「うん。そうだね」

素直にうなずいてから、百井はふと、道の途中で立ち止まった。そうして、歩き出そうとしないまま、まぶしそうに目を細めて、俺を見る。

「僕、今日のこと、いつか思い出す気がする。大人になって、おっさんになって、おじいさんになった後も、⑭何度も、何度でも思い出す気がする」

「おう」

「あんなふうに全力で走ったの、初めてだった。水切りも取っ組み合いも、全部」

「……ああ」

「矢代くん」

ありがとう、と百井が言った、その声がかすかに震えていたことを、俺は一生忘れないと思う。⑦俺のほうがありがとうだよ、と本当は言いたかった。でも、こんな時でさえ、意地っ張りで⑧ミエっ張りな俺は、なんにも言えないんだ。

やがてたどり着いた交差点で、俺たちは今度こそ、別れのあいさつを⑨力わした。

「じゃあね」と、百井が大きく手をふり、

「おう、じゃあな！」と、俺も思い切り手をふり返す。

そしてそれぞれ、前を向いて歩き出した。百井の靴音が遠ざかり、やがてそれは、聞こえなくなる。だが、俺はもうふり返らなかった。涙は出ない。だけど、⑩フシギな気持ちだ。背筋がちゃんと伸びたような。夜風にぴしりと頬を打たれたような。

ちやんと、俺も大人になりたい。

初めて心からそう思った。いつだってりと背筋を伸ばして、自分の足で、揺るぎなく歩いていけるように。そうしたら、たとえ今は⑪エダ分かれした道も、どつかで百井につながるような気がする。いつか、きっと。

——なあ、そうだろう。百井。

心の中で、呼びかけて、俺はそつと空をあおぐ。

小さな無数の星くずが、そこには強く、たくましく、光っていた。

問1 —— ㊶㊷㊸について、カタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問2 ㊸㊹㊺「仰々しくて」、㊻㊼「ありきたりな」、㊽㊾「ひとりよがり」について、本文中の意味としてふさわしいものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

A 仰々しくて

ア 意味がなくて イ えらそうで ウ 大げさで エ 格好良すぎて オ 複雑で

B ありきたりな

ア 意外な イ 古風な ウ 残念な エ 平凡な オ 冷静な

C ひとりよがり

ア 自業自得 イ 自己弁護 ウ 自画自賛 エ 自己満足 オ 自作自演

問3 ㊿ⅠⅡⅢに入ることばを次から選び、記号で答えなさい。

I	ア 気がおけない	イ 気をもんだ	ウ 気に食わない	エ 気が引けた	オ 気の抜けた
II	ア あっさり	イ うっかり	ウ おっとり	エ しっかり	オ ゆったり

問4 —— ①「俺はふう、とため息をついた」について、このときの俺の気持ちを説明しなさい。

問5 ——②「わだかまっていたもどかしさの理由」とはどういうことか、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 百井が本当は負けん気が強いやつであると知らなかったこと
- イ 百井が自分以上に別れをおしんでいるのに気づかなかったこと
- ウ 百井からどう思われるか気になって素直に行動できなかったこと
- エ 百井とは大きな声で叫びあうような付き合いをしてこなかったこと
- オ 百井と会うのも今日が最後だという実感がまったくわかなかったこと

問6 ——③「構わず俺は、一氣につづけた」について、この時の俺の気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 百井の反応が予想と違っていたため、どうしたらよいかわからないと思っている
- イ 百井の反応が良くなかったため、とにかくしゃべって何とかしようと思っている
- ウ 百井の反応をどうとらえてよいかわからず、とりあえず何か話そうと思っている
- エ 百井の反応がどうであれ、今自分の思いをぶつけなくてはいけないと思っている
- オ 百井の反応が予想通り悪かったので、けんか腰でしゃべるしかないと思っている

問7 ——④「それは、まぎれもない、子どもの百井の顔だった」について、この時の俺の気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 百井が自分に子どもの顔を見せようとしなかったことに気づき、おこっている
- イ 自分と同じように百井にも子どもの部分があったことを知り、あきれている
- ウ 別れるその日まで子どもらしい百井に気づくことができず、くやんでいる
- エ 百井が自分と同じような気持ちになってくれたと思い、ほっとしている
- オ 予想よりうれしそうな百井を見て、期待させすぎたとうろたえている

問8 ——⑤「こういうの」の内容を二十字以上三十字以内で説明しなさい。

問9 ——⑦「俺のほうがあるがとうだよ」について、このように思ったのはなぜか、説明しなさい。

問10 ——⑥「何度も、何度も思い出す気がする」とあるが、あなたが何度も思い出す出来事について教えてください。

(2020年度 第1回 2月2日実施)

国語 解答用紙 その1

受験番号	
氏名	

[illegible]

国語 解答用紙 その2

氏名

10

[illegible]